

自己評価報告書(最終報告)

報告者

言語系コース(英語)／藪下
克彦

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

- ① 授業内容に関しては、教員養成大学だからということでは「授業ですぐに役に立つ」内容やテクニックなどを教えるのではなく、あくまで学問としての基盤、方法論、知見を体系的に教える。
- ② 授業方法に関しては、上で述べたように内容そのものはあくまで正統的内容を扱うが、現場での教育内容との関連性、また、それを自分が生徒に教えるとき、どのように教えるかということを常に意識させるような授業を行う。
- ③ 成績評価に関しては、学問としての専門知識を問うテストを行うが、その専門知識を現場での教育内容との関連性の中で理解しているか、また、生徒にその内容を教えることができるかという観点で評価を行う。

2. 点検・評価

前期・後期の全ての授業において、上記の目標を達成した。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

勉学はもちろんのこと、生活、進路に関する相談、教採対策など、幅広く学生の教育・生活支援を行っていきたいと思っている。特に、担任をしている英語コース学部2年生が一年次に引き続き、二年次もクラス全員が仲間として向上していくことができるような支援をしたいと思っている。

2. 点検・評価

学部4年次生の1人から教員採用試験の英文法問題の指導の要請を受け指導した。ちなみにその学生は、県立高校の英語教員として正式採用が決定した。また、担任をしている英語コース学部2年次生とは、授業の前後、また、食事会(ランチ)などの機会を利用して、修学、生活上の状況の把握に努め、クラスメートとしお互いを高める意識を高める配慮をした。プライベートな問題に関しては、研究室で個別に対応した。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

- 最近、意味論において、許可を表す文、例えば、英語で言う“*You may/can*”で始まる文にまつわる特異な性質が注目されている。これらの性質がどのように生まれるのかに関しての有用な示唆を得るべく、日本語の許可文の一形式である「～してもよい」の分析を試みる。
- 現在、英語を話す際、日本人の名前を言うとき、いわゆる「下の名前」と「上の名前」のどちらを先に言うのかに関しての決まりはない。どちらが適当であるかを論議する際、よく聞かれるのは「英語の流儀に従うべきである」とか「日本人なのだから日本の文化・習慣に従うべきである」とかの理由を聞くが、どちらの立場にも一理あり結論は出ない。これは、どのような目的のためにはどちらの順番が有用であるかということをはっきりとせずに議論しているのになってしまうのは当然である。そこで、私は、目的を設定するとどちらの名前を先に言うべきかという問題に解が与えられる分析枠組みを提案したいと思っている。
- 小中高における英文法の指導の実態と問題点を研究する課題で、科学研究費補助金などの研究助成の公募に申請し、学外資金の調達に努める。

2. 点検・評価

- 許可文の意味論に関しては、あまり成果が得られなかった。
- 英語を話す際の日本人の姓と名の順序に関しては、学校教育の英語教科書では「姓一名」の順序が広く採用されているのに対し、「現実社会」においては、「名一姓」の順序が断然優勢であることを明らかにした。その上で、情報の正確な伝達という目的からは、「名一姓」の順序が合理的であることをゲーム理論の枠組みで明らかにした。そこで、当然出てくる「なぜ、日本の英語教科書では「不合理な」「姓一名」の順序が採用されているのか」との疑問には、2001年に国語審議会が日本人の名前をローマ字(アルファベット)で書くときは、「姓一名」の順序が望ましいと表明したことにより、教科書著者、編集者、会社が教科書検定を意識し、国語審議会の意向に沿ったのではないかという仮説を立てた。研究成果を2013年8月3日に開催された「鳴門教育大学英語教育学会第28回大会」で口頭発表した。また、2014年1月5～8日にハワイ・ホノルルで開催された「ハワイ国際教育学会第12回大会」でも口頭発表した。さらに、このトピックについて、2014年3月24日に香港のCity University of Hong Kongの招請で講演を行った。現在、論文を執筆中である。
- 小中高における英文法指導の実態と問題点の研究に関しては、準備の段階で終わり、科学研究費補助金などの研究助成申請に至らなかった。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

学部入試委員会副委員長、学生支援委員他の業務を中心にして大学運営に貢献したいと思っている。

2. 点検・評価

学部入試委員会副委員長、学生支援委員他の業務を真摯に遂行した。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

- 授業(「教科教育実践」、研究授業)などの機会に、附属学校教員との交流を深め、共同研究の環境づくりに務める。(附属学校)
- 大学と地域・社会また留学生との交流、相互理解を図りたい。(社会連携、国際貢献)

2. 点検・評価

- 附属学校教員との連携・交流に関しては、実地教育期間中の研究授業への参加、「初等中等教科教育実践I」の一環としての附属小学校での授業に学生を引率した。
- 地域・社会との連携に関しては、免許状更新講習の講師を務めた。
- 留学生との交流に関しては、英語コースに所属している教員研修生と研究室で時折、お茶を飲みながら、研修生の祖国、日本のこと、修学・生活上の問題点などを話した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

平成25年度文部科学省特別経費事業「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」の教員養成モデルカリキュラム研究開発委員会委員、カリキュラムマップ・ガイドライン研究協議会委員を務めた。また、この事業の一環として作成された小学校教科(専門)内容の学部教科書の中の一つ「小学校英語教育論」の執筆に携わった。